

保育内容「言葉」から「国語」へ  
― 児童文化財としての「お話し」の教材研究(一) ―

柴田奈美

要約

「おおきな かぶ」は、一九六六年六月に刊行されて以来、読み継がれている絵本であり、現在、五社の小学校国語教科書(一年)に採用されている。このことは、読み聞かせの絵本として、また自分で読んで理解する国語の教材として、優れた価値が認められていることを意味すると考えられる。本稿では、教科書に採用されている「おおきな かぶ」の、言語表現を分析することによって、その教材の魅力を再確認することを目的とした。その結果、小学校一年生の教材にふさわしく、文章にリズム感があり、言語感覚を磨き音読を楽しむために必要な表現が工夫されていることを具体的に明らかにした。さらに、分析を深めることによって、主題の捉え方が深まっていくことも指摘し、内容に深みのある教材であることも確認した。

「キーワード」 「おおきな かぶ」・「国語」・「主題・構想・叙述」

はじめに

「おおきな かぶ」(注1)は、一九六六年六月に刊行されて以来、読み継がれている絵本であり、現在、五社(注2)の小学校国語教科書(一年)に採用されている。読み聞かせの絵本として、また自

分で読んで理解する国語の教材として、優れた価値の認められたものと考えられる。

本稿では、教科書に採用されている「おおきな かぶ」の、特に言語表現に注目しつつ、その教材の魅力を再確認することを目的とする。

教材は、光村図書「西郷竹彦の訳によるものを対象とした。研究方法は、「主題」「構成」「叙述」の視点から分析を行い、考察を加えていった。

一、文章表現と主題

まず、「おおきな かぶ」の文章表現を、場面ごとに記しておく。

① おじいさんが、かぶの

たねを まきました。

「あまい あまい かぶに

なれ。おおきな おおきな

かぶに なれ。」

② あまい あまい、

おおきな おおきな  
かぶに なりました。

③ おじいさんは、かぶを  
ぬこうと しました

「うんとこしよ、どっこいしょ。」  
けれども、かぶは ぬけません。

④ おじいさんは、おばあさんを よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっぱって、  
おじいさんを おばあさんが ひっぱって、

「うんとこしよ、  
どっこいしょ。」

それでも、かぶは ぬけません。

⑤ おばあさんは、まごを  
よんで きました。

かぶを おじいさんが  
ひっぱって、

おじいさんを おばあさんが  
ひっぱって、

おばあさんを まごが  
ひっぱって、

「うんとこしよ、  
どっこいしょ。」

やっぱり、かぶは ぬけません。

⑥ まごは、いぬを よんで きました。  
かぶを おじいさんが ひっぱって、

おじいさんを おばあさんが ひっぱって、  
おばあさんを まごが ひっぱって、  
まごを いぬが ひっぱって、

「うんとこしよ、  
どっこいしょ。」

まだまだ、かぶは  
ぬけません。

⑦ いぬは、ねこを

よんで きました。  
かぶを おじいさんが

ひっぱって、  
おじいさんを おばあさんが

ひっぱって、  
おばあさんを まごが

ひっぱって、  
まごを いぬが ひっぱって、

いぬを ねこが ひっぱって、  
「うんとこしよ、

どっこいしょ。」  
なかなか、かぶは

ぬけません。

⑧ ねこは、ねずみを  
よんで きました。

かぶを おじいさんが  
ひっぱって、

おじいさんを  
おばあさんが

ひっぱって、  
おばあさんを  
まごが

ひっぱって、  
まごを いぬが

ひっぱって、

ねこを ねずみが

ひっぱって、

「うんとこしょ、

どっこいしょ。」

⑨ とうとう、

かぶは ぬけました。

おじいさんがかぶの種を、甘く大きく育つようにと願って撒いた。願い通りに育ったが、いざそれを抜こうとしても、おじいさん一人では抜けない。おばあさん・孫・犬・猫・ねずみと次々に手助けが増えていき、とうとうかぶが抜ける、というストーリー。

一読、主題は「協力による目的達成の喜び」を直観できる。分析を深めたうえで、再考したい。

二、構想

一行空きによって段落が示され、九の段落で構成されている。短いストーリーであるので、大きく次の三部分に分けたい。

- I かぶの種まきとかぶの生長
- II 抜けないかぶへの挑戦の繰り返し
- III かぶの収穫

三、叙述

段落ごとに、言葉に着目して分析を行い、理解を深めていく。

1 「おじいさんが、かぶの たねを まきました」……格助詞「が」

は、三段落に出てくる「おじいさんは」の副助詞「は」と比較し、改めてその意味の違いに気づかせるために都合のよい事例である。

即ち、「が」は大体において未知のものについて言われ、「は」は既知のものについて用いられる。お話の冒頭に出てきた、未知の「おじいさん」という主格を示す「が」である。

「かぶ」：アブラナ科の多年草。カブラともいう。ヨーロッパあるいはシベリア温帯にわたる地域が原産地。夏に種をまき、旬は秋か冬。日本では米飯の増量材料に、また凶作時の「かてもの」として重要であった。ロシアの郷土色が感じられるとともに、庶民の食料として身近に感じられる素材である。

「あまい あまい かぶに なれ。 おおきな おおきな かぶに なれ。」……おいしいかぶに育ってほしいという願いと、多くの家族の食料として満ち足りる程の量の収穫への期待が込められている。繰り返しと対句表現によって、リズムが生まれている。しかも、「あまい」(三文字)から「おおきな」(四文字)へと字数が増加していつており、気持ちの高まりも感じられる。

2

「あまい あまい、 おおきな おおきな かぶに なりました」……一段落目のおじいさんの「うなれ」という願いに対し、長い時間の経過後、そのとおりのかぶができた。夏に種をまき、秋に大きく生長するまでの期間、おじいさんは種をまいた時と同じ思いを込めて、毎日手入れをしていたことが想像できる。

3

「おじいさんは、かぶをぬこうとしました」……「ぬこうとしました」は、「ぬけません」(三、四、五、六、七段落)、

「ぬけました」(九段落)という文末表現に対応している。

「うんとこしょ、どっこいしょ」……同じせりふが後で繰り返して出してくるが、この部分のみ、一行で書かれている。他の二行書きに比べると、力の入り方が少ないように感じられる。一人だけの力の少なさが強調されている。

「けれども、かぶはぬけません」……おじいさんが力いっばいかぶを抜こうとしたにもかかわらず、かぶは抜けない。逆接の接続詞「けれども」には、「当然抜けるはずなのに」という意外な気持ちが含まれている。

4

「おじいさんは、おばあさんをよんできました」……自分にとって一番身近な人と呼んで、協力を頼んでいる。以後、その繰り返しであるが、身近な人(動物)で、自分より力の劣っている人(動物)を呼んでいる点が面白い。

「かぶを おじさんが ひっぱって、おじいさんを おばあさんが ひっぱって」……目的語・主語・述語の繰り返しで、一般的な主語・目的語・述語の語順ではない点、この訳の工夫である。これは、絵本の挿絵に描かれている順であるとともに、かぶ、おじいさん、おばあさん、………というように、かぶを抜こうとする皆の力がひとつになっていることも、強く感じる。

「うんとこしょ、どっこいしょ」……おじいさんとおばあさんのせりふである。力を合わせ、声を合わせて引つ張る様子を想像しながら、楽しく、音読できる部分である。以後、手助けする人数が増えるに従って、声も力も大きくなっていく。

「それでも、かぶはぬけません」……おじいさんとおばあさんという大人二人が力を合わせたにもかかわらず、かぶは抜けない。「それでも」には、「こんなに頑張ったのに抜けない」

という困惑した気持ちが窺える。

5

「おばあさんは、まごをよんできました」……挿絵によって、女の子であることがわかる。「主語+は+目的語+をよんできました」は、前段落と同様の表現であり、その後も繰り返される。

「やつぱり、かぶはぬけません」……「やつぱり」は、副詞「やはり」の気持ちを強めた言い方であるとともに、「けれども」「その後」「まだまだ」(六段落)、「なかなか」(七段落)、「とうとう」(九段落)のように統一されている。「やつぱり」には、「孫が加わっても抜けないと思っていたが、その通り」という気持ちが込められている。

6

「まごは、いぬをよんできました」……三人の協力から、動物の協力へと物語は展開していく。人間にとつて身近な犬が登場し、その後「ねこ」「ねずみ」の登場のきっかけとなるが、この時点ではまだファンタジー性は薄い。

「まだまだ」……副詞「まだ」を強めるとともに、前述のようにリズムを統一した表現となっている。人間はもういないので、犬まで呼んできたにもかかわらず、なお力が足りない。もつと、もつと協力者が必要だという気持ちが込められている。

7

「いぬは、ねこをよんできました」……犬がどうやって猫を呼んだのか。このあたりからファンタジー性が強くなってくる。

「なかなか」……副詞「打ち消しの言葉をともなつて、簡単にそのようにはいかないことを表現。家で飼っている犬や猫の協力を得ても、なかなか抜けないかぶ。一体どうすればよ

いのか……。いよいよクライマックスに向かう予感を与える。

8 「ねこは、ねずみを よんで きました」……。現実の世界ではあり得ない、猫とねずみの協力。ここでファンタジー性は、ますます強まる。人間の生活に害を与え、人間の飼う猫によって食べられるねずみが、おじいさんの収穫作業に協力するのである。「収穫」という一つの大きな目標に、人間と動物が協力している点、主題の深みが増していると考えられる。

9 「とうとう、かぶは めけました」……。この一文だけを独立させ、しかも「とうとう」で改行し、ついにかぶが抜け、目標が達成したことを強調している。副詞「とうとう」は、物事の最終的な結果の現れるさまを表す。協力を次々に呼び集め、力を合わせた結果の収穫。淡々と書かれているが、かぶが抜けたことの喜び、土の中から現れた大きなおいしそうなかぶを見つけた驚きと喜びが想像できる。

おわりに

小学校一年生の教材にふさわしく、文章にリズム感があり、言語感覚を磨き、音読を楽しむために必要な表現が工夫されていた。適切な接続詞や副詞の多用によって、リズムが生まれるとともに、登場人物の気持ちを読みとれる。この気持ちの理解によって、音読の仕方に各自の工夫のなされることが期待できる。

主題に関わることとしては、力の弱い者が加わり、最後に「ねずみ」という小さな生き物の力が加わって目的が達成されるという点に、面白味が感じられる。人間と動物の協力という点に、ファンタジー性を超えた「人間と動物の共存」というメッセージも感じられる。また、協力の目標が「かぶを抜くこと」であるから、丹精込

めて育てた植物の収穫の喜びも、人間の生きていく力を支える源として、大切なものであると考えられる。

先に、主題を「協力による目的達成の喜び」としたが、以上述べたものまでを含む、深みのあるものであることを確認することができた。

注

(1) ロシア民話、A・トルストイ再話、内田莉莎子訳、佐藤忠良画

(2) 光村図書・東京書籍・学校図書・日本書籍・教育出版

参考文献

松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 一九七三年十月

渋谷孝・市毛勝雄編著者『実践言語技術教育シリーズ』小学校編第1

巻 大きなかぶ』明治図書出版株式会社 一九九七年八月

二〇〇二年 十月三十一日受付  
二〇〇二年十二月二十五日受理